

島根の記憶

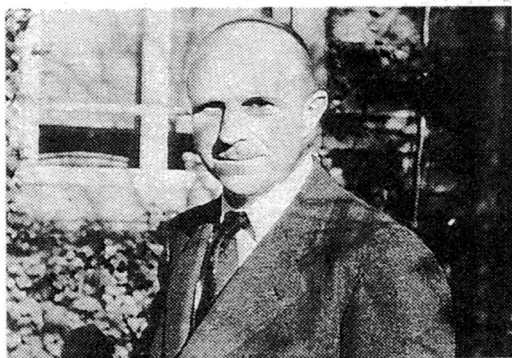
①

手元に膨大な数の写真のコピーがある。旧制松江高（現島根大）の教壇に立ったドイツ人哲学者フリッツ・カルシュが、大正末期から昭和初期にかけて撮影した松江市や周辺の風景、風俗だ。小泉八雲に影響され、八雲が松江を去った三十四年後の一九二五年に来日し、三十九年まで十四年間、松江で暮らした。カルシュを研究する若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授の手で発見された写真と資料をもとに、カルシュの足跡をたどり、変わり、変わらぬ何かを見つめてみたい。

袖師ヶ浦の地蔵



カルシュ、大正―昭和の写真1500枚残す



膨大な島根の風景を残したフリッツ・カルシュ

日影の番号と撮影場所などが、癖のあるドイツ語で添えられている。画質が黄ばむなどの劣化は驚くほど少なく、保存状態は良好という。松江郷土館の新庄正典学芸員は「この時代、一人がこれほど多くの写真を撮っているのは大変珍しい。山陰の原風景を伝えるものばかりで、後世に残していきたい」としている。

来日した長女メヒテルン(76)、二女フリッテ(67)をもうけた。滞在中は非常に活動的で、ドイツ製カメラとアメリカに住む二人の娘の家にアルバムが現存。写真は1500枚以上とみられ、若松教授が2001年から2002年にかけて一部を入手。ほと

に飽き足らず、精密なパステル画も描いている。浜乃木干拓が始まる三十年近く前、一体は自然石の転がる砂浜の一角に立ち、周辺は水浴場だった。

「子供たちの絶好の遊び場で、真っ裸でよく泳いだ。嫁ヶ島に通じる水中参道の『弁天道』も、ひざ辺りまでの深さで、島まで年中行けましたよ」。毎年八月に供養を欠かさない、近くの円成寺の若槻大峰住職(67)は振り返る。

「嫁ヶ島残照」は、今も宍道湖を代表するスポットだが、当時はより風情があったという。しかし間もなく、若き哲学者に悲劇が訪れた。長男が生後七日で死

亡き子しのばせる湖畔

宍道湖畔に佇む二体の地蔵は、穏やかで慈悲深い面差しをたたえていた。ともに右手に錫杖、左手に宝珠を携え、西方浄土を向く。高さ二・五メートル、来待石特有の深みを帯びた



若松教授を研究するカルシュ

一体が袖師地蔵、一回り小さい御影石製の石灰地蔵。故郷を離れ、対峙した

「お役所も、なくしてしまつと、バチが当たると思ってたんでしょうか……。昔から、子を亡くした親御さん

が、お参りに見えます」

亡、その遺骨は母国に持ち帰った。我が子を想い、子供を護る地蔵に見入ったとしても不思議ではない。一体は七年、市道拡張に伴い、西に約百二十メートル移動して現在の場所に。袖師地蔵は江戸時代初期に建てられたが、九三年に造り替えられ三代目となる。移設に際して、父敏郎さんが市や旧建設省に掛け合ったという焼き物「袖師窯」の四代目尾野晋也さん(64)はい

現在の地蔵2体。移設前より嫁ヶ島が近い

